



# 上川井だより

1月号

平成31年 1月 7日  
横浜市立 上川井小学校  
校長 山田 アイ子

## 「新しい年の初めに」

校長 山田 アイ子

明けましておめでとうございます。晴天に恵まれ、穏やかな新年の幕開けとなりました。どうぞ、本年もよろしくお願い申し上げます。

私は、今年も年明け2日に、権太坂で箱根駅伝の応援をしました。権太坂で応援するようになって、今年で丁度10年になります。ここ最近、特に沿道で応援する人が増え、箱根駅伝への関心が高まっていることを感じます。

「みかんを食べながら、炬燵に入り、家族そろってテレビで箱根駅伝を見る」ことが、子どもの頃のお正月の記憶にあります。勤務していた学校が権太坂の近くだったことが、沿道で応援するようになったきっかけでした。それが10年続くと、私の中で箱根駅伝の応援は「一年の元気をもらうこと」になりました。選手の一生懸命な姿、一人一人の箱根にかける思いなどを見たり聞いたりすることで「自分も自分らしく頑張ろう」と、思うことが一年の始まりのような気がしています。

今年の箱根駅伝は1区で転倒する選手がいて、はらはらしました。その選手が何とか走り切り、タスキを繋げることができ、安堵した私でしたが、ある箱根駅伝経験者の言葉を聞いて、はっとしました。それは「けがをした選手が走っている様子は感動する場面ではない。心配する場面だ。」の言葉でした。勿論、私も心配していました。しかし、今までの箱根駅伝において、足を引きずり、ふらふらに蛇行しながらも、なんとかゴールにたどり着こうとする選手の姿を見て、その姿に感動した自分がいます。経験者の言葉は、駅伝が終わってから心に残り、転倒した選手のその後が気になっています。走り続けたことの是非は分かりませんが、レース直後も、ずっと後になっても、選手自身が「走り切ったよかったです」と思えることを願うばかりです。

私は、子どもたちが自分のことを、自分で決められるようになってほしいと思っています。例えば、係やクラブ、委員会を選ぶにしても「何がやりたいから○にする」、たとえ自分一人でも「私はこの意見に賛成と言える」、言い換えれば「人に左右されることなく自分の気持ち、意思をしっかりともてる子」と言ってもよいと思います。小さなことでも、誰かに決めてもらうのではなく、自分で決められる子になってほしいのです。自分で決めたことが、たとえ、思うようにいかなくても自分で決めたことだからと、納得できるのではないかと思うのです。子どもたちの姿と重ね合わせて、そんなことを思いながら箱根駅伝を応援しました。

今年は元号が変わる年…東京オリンピックまで2年を切った…平成最後の年…そんな言葉を聞くことが多くなった気がします。それを聞いたときに、何かに急かされているように思えてなりません。特別な何かをしなければいけないのだろうか、こんなことをしている場合じゃないのかしらと落ち着かない気持ちになることがあります。

そんなときこそ、落ち着いて、目の前にいる子どもたち一人一人に寄り添い、一人一人を大切にしたい学校づくりをしなければならないと思います。

本年も教職員一同、力を合わせて、子どもたちの成長のために努力していきます。保護者の皆様、地域の皆様、どうぞ、本年も変わらぬご支援を頂きますようお願い申し上げます。